

長谷川成一監修

『弘前城築城四百年―城・町・人の歴史万華鏡』

相馬 英生

近年は歴史ブームだという。そのためか、全国各地の歴史にまつわる観光地は大勢の人々で賑わい、各自自治体は歴史的文化遺産を活用した地域おこしに躍起となっている。ここで、青森県内に目を向けると、二〇一一年、弘前城は築城四百年を迎える。周知のように、弘前城は本州最北端の近世城郭を持つ津軽氏の居城であり、また近代以降は弘前公園として、満開の桜を中心に季節を問わず、全国から多くの観光客を引きつけてやまない地である。二〇一〇年十二月には、東北新幹線が青森市まで伸張したことで、青森県内、特に津軽地方では観光面での一層の波及効果が期待されている。

しかし、歴史ブーム、新幹線効果といった文言が飛び交う状況下にあつて、本書を監修された長谷川成一氏は、若い市民との懇談のなかで「弘前城の成り立ちや弘前城下の変遷、弘前城の歩みについて、正確な知識がやや不足しているのではないか」という危惧の念を抱かれたという。本書はこのような状況を「多少なりとも改善し、弘前城を城郭の視点からだけでなく、その歴史的背景も含めて総体的にとらえてほしいと願って編集したものである」とあり、東奥日報社による築城四百年に向けての企画「弘前城 二〇一一年築城四〇〇年へ向けて 城・町・人の歴史万華鏡」として「東奥日報」紙上に五一回にわたり連載されたものがベース

となっている（連載期間は二〇〇九年五月十六日～二〇一〇年五月二十九日）。

執筆者は大学や博物館の研究機関に属する研究者や文化財保護に携わる行政職員といった第一線で活躍中の十八名のメンバーで、執筆内容も考古学、歴史学（中世、近世、近現代）、民俗学と多岐にわたり、三つの章がそれぞれ一七項目、合計五一項目から構成されている。いささか長くなるが、全項目を掲げてみよう。

老 城の章「北狄の押さえ」から師団施設、公園への有為転変

- 1 弘前城と津軽領―弘前城は四万七千石の城か？
- 2 慶長十六年の築城―幕府公認 領内の城郭を集約
- 3 国絵図にみる弘前城―幕府に従い城を「□」で表す
- 4 南溜池―軍事的性格薄れ 憩いの場に
- 5 弘前城の石垣―時代性・技術の伝播絡みあう
- 6 元禄の石垣普請―「飢饉の原因」と感じた民衆
- 7 津軽信政の天主再建計画―藩内に動揺 四〇人超す処罰も
- 8 城跡から出土の陶磁器―九州産の高級食器 数多く
- 9 城跡に現存する建物―蝦夷地警備と深い因縁
- 10 城跡の失われた建物―絵図資料から様子を推測
- 11 規模と曲輪配置―大きく堅固な信長・秀吉流
- 12 文化の高直りと天主の再建―藩政崩壊への道を加速
- 13 幕末・明治維新と城地―公園として政府から借用
- 14 弘前公園の成立―津軽家、旧城払い下げの悲願

- 15 観桜会とさくらまつり―植栽を重ね大正期から活況
- 16 陸軍と弘前城―兵器関連施設 三の丸に立地
- 17 戦後の弘前公園―青森県を代表する一大観光地に

式 町の章「城下町から軍都、学都への歩み」

- 1 長勝寺構と新寺構―当時の都市計画伝える遺構
- 2 長勝寺と諸寺院―城下へ寺社移転、藩が統制
- 3 青森町の町立て―弘前城内の屋敷配置に倣う
- 4 絵図にみる町割りと岩木川―移り変わり 貼紙で修正
- 5 弘前城下・津軽領のねぶた―町ごとに運行 競い合い喧嘩
- 6 領国貨幣「津軽銀」―佐渡の山師招聘 城下に職人
- 7 元禄飢饉と武家の郭外移転―藩士大量解雇で町並み変化
- 8 弘前藩と敦賀・大津・大坂蔵屋敷―上方へ米売却 海運盛んに
- 9 弘前藩の京都屋敷と津軽町―官位・官職拝領の重要拠点
- 10 弘前藩の江戸屋敷―幕命で神田から本所へ移転
- 11 比良野貞彦が見た弘前城下―歴史研究の貴重な資料に
- 12 白神山地と弘前城下―燃料の薪材 岩木川使い運ぶ
- 13 城下町の伝承と記憶―暮らしに息づく近世の記憶
- 14 城下町の災害―災害教訓「雪下ろし」に
- 15 人々の食事―藩政時代の酒・料理・菓子
- 16 養虫山人が見た弘前・津軽―岩木川沿いの街並みを描写
- 17 リンゴ生産を支えた弘前の地場産業―「初なり」機に会社組織誕生

参 人の章「貴賤、聖俗、老若男女、貧富の別問わぬ悲喜こもこも」

- 1 西洞院時慶と津軽信建―関ヶ原後 京都で情報収集
 - 2 信杖・満天姫・天海―幕府と津軽家の関係築く
 - 3 弘前城下の家臣団―侍屋敷で一五〇〇人以上生活
 - 4 津軽本家と黒石分家―江戸期は密接な血縁関係
 - 5 弘前藩と盛岡藩―常に「気になる存在」
 - 6 夷島からみた弘前、津軽領―お家騒動など興味深い記述
 - 7 殿様の印鑑―公的な黒印、性格表れる私印
 - 8 岩木山信仰の風説―「天気不正」自然破壊へ警鐘
 - 9 弘前・津軽を訪れた人々―仏像や地図など足跡残す
 - 10 蝦夷地警備と津軽領―領民動員で労働力不足に
 - 11 藩校稽古館の設立と展開―寛政改革で藩士の教化図る
 - 12 平田国学と鶴舎（鶴屋）有節・平尾魯僊―学問と知のネットワーク
 - 13 百沢寺と松前阿吶寺・高野山清浄心院―阿吶寺の住持めぐり争論
 - 14 『忍ぶ草』と弘前城―蝦夷地警備藩士の姿を描く
 - 15 お殿様の墓・庶民の墓―戒名の格が高いと墓石大きく
 - 16 術から道への武芸改革―幕末以降 大きく変化した技術
 - 17 明治の外国人が見た津軽―リンゴ栽培や藍染書き残す
- 参考文献
あながき
- 一見してわかるように内容が多方面にわたり、書評を書くことは容易

ではないが、以下、各章ごとに紹介していく。

まず、「城の章」は弘前城を中心として、弘前城築城から戦後の弘前公園までの変遷に関する事項からなる。最初に津軽家の「北狄の押さえ」としての役目と弘前城の規模との関係が明らかにされ、国絵図と弘前城、南溜池、石垣普請、四代藩主信政による治世と天守再建計画の頓挫、弘前城跡出土の陶磁器と津軽家の経済力との関係といった藩政初期における諸問題が述べられる。また、藩政中期から後期にかけては、文化五年、十万石への石高昇格、蝦夷地警備負担とその見返りとして認められた弘前城主の建設、民次郎一揆、南部家との家格上昇競争とそれがもたらした相馬大作による藩主寧親の狙撃未遂事件等についてふれられ、さらには現在に伝わる貴重な弘前城主を始めとする城内の櫓や門について、歴史学と考古学の膨大な先行研究や保存事業の成果が示される。近代に入ると、明治四年（一八七二）、東北鎮台一分営の城内設置を発端として、弘前城は軍事施設としての性格を色濃くしていく。やがて、明治三十五年（一九〇二）、津軽家から弘前市への公園管理移管、戦後は昭和二十七年（一九五二）、弘前城一帯が国指定史跡となり、現在の桜と城郭がセットとなった観光地に至るまでの経緯といったことが各項からわかる。

ここで、弘前城の特色として筆者が最も印象に残ったのは、津軽氏が幕府から与えられた「北狄の押さえ」としての役目と引き換えに、領地高が四万七千石にも関わらず、十万石クラスの大名に匹敵する規模の居城建設が許可されたということである。幕藩体制下において、津軽家に与えられた役目の重さを象徴するものこそが、弘前城であったといえよ

う。

続いて、「町の章」は「城下町から軍都、学都への歩み」として、近世城下町弘前に関する事項からなる。

ここではまず、弘前城の周囲を寺社配置で囲む壮大な惣構えについて位置づけがなされる。すなわち、大規模な土木工事による惣構えの構築は、為信一代で津軽全域の領主となった近世大名津軽氏にとって、その力と支配の正当性を知らしめる「重要な威信装置」であったということである。津軽氏が圧倒的な規模の労働力と財力を集め、集中的な突貫工事によって、近世城郭と都市からなる近世城下町を本州最北端の地に突如として出現させたこと、領内から城下へ寺社、武士団、商人・職人を集住させたこと、この二点は近世城下町成立の典型的事例が津軽の地において展開したことを如実に物語っている。

しかし、初期弘前城下の景観は元禄飢饉がもたらした大量の下級藩士「減少」（召し放ち）によって生じた空き屋敷へ、城内に居住する家臣団を移住させることで、一変することになった。また「津軽弘前城之絵図」から窺える町割りの変遷、弘前藩蔵米の上方への移出拠点としての鯉ヶ沢や深浦と日本海海運との関係、敦賀・大津・大坂の各蔵屋敷、京都屋敷、江戸屋敷それぞれの持つ機能、弘前城下と青森町に見られる類似した町割り、近世の喧嘩ねぶたを起源とする現代のねぶた祭り、弘前藩独自の領国貨幣「津軽銀」と発行を可能とした領内の鉾山群について、それぞれ説明がなされる。その他にも、比良野貞彦が見た弘前城下、燃料薪供給地としての白神山地、伝承と現在につながる年中行事の数々、城下を襲った水害、火災といった諸災害、食生活の多様性、放浪の画家

蓑虫山人が描いた弘前、津軽、士族授産の一環として始まったリング生産といった幅広い話題が提供されている。

参 人の章「貴賤、聖俗、老若男女、貧富の別問わぬ悲喜こもこも」

「人の章」では、章題にもあるように、人々にスポットをあてている。特に、津軽信建と西洞院時慶との親交、松前慶広と為信・信建の因縁の対立、百沢寺と信建妻を祀った高野山清浄心院とその末寺である松前阿吽寺に関する記述を読むと、津軽家の正史から抹殺された津軽信建の実像が浮かび上がってくる。また信枚と正室満天姫、天海と信枚の師弟関係、歴代藩主の性格を表す私印、岩木山信仰や風説、弘前や津軽を訪れた円空、古川古松軒、菅江真澄といった人々、領民へ過大な負担を強いた蝦夷地警備と犠牲となった藩士を偲ぶ『忍ぶ草』、さらに弘前藩の学芸として、藩校稽古館の設立と展開、平田国学と鶴屋有節との関係、学問的に高水準を誇った津軽平田グループの一員であり、民俗学の先駆者でもあった平尾魯僊らを取り上げている。一方、考古学や民俗学の成果として、身分階層ごとにちがいが見られる近世の墓石についてや、そして、武道が幕末以降大きな変化を遂げて、剣術や撃剣が剣道へと変化していったことなどは興味深かった。そして、ジョン・イングやA・C・マックレーといった明治初期に外国人が見た津軽の紹介もなされる。

最後に、本書を読んで感じたことを述べてみたい。

まず、本書を構成する五一の項目によって、弘前城や弘前城下、城下に暮らす民衆の生活、信仰、文化のほぼすべてが網羅されているといっても過言ではない。次に各項のどれをとっても、読み手にとって理解しやすい記述となっていることに驚かされた。もともと、読みやすく、理

解しやす記述といっても、長年にわたり蓄積された弘前藩に関する膨大な研究成果に裏打ちされたものであることに疑いの余地はない。そして、本書の随所に最新の研究成果が反映されていることを申し添えたい。次に、口絵のカラー写真を始めとして、多くの図版が収録されていて、見ていて楽しい。さらに「ひとくちメモ」によって、補足の説明がなされ、読者の理解を一層深めている。ただ、筆者の力不足ゆえ、すべての内容を十分紹介しきれなかったことをお詫びしたい。

歴史ブームの世の中にあつて、信頼に足りる出版物はどれほどあろうか。本書には弘前城や弘前藩について「歴史学」をはじめとする諸学問の成果が凝縮されている。本書を片手に一人でも多くの方に弘前を訪れて欲しい、そう切に願うものである。

(二〇一一年一月刊、四六判、二七〇頁、清文堂出版、

価格二七〇〇円十税)

(そうま・えいせい 三戸町立図書館)

―彙報―

◎弘前大学国史研究会例会は、左記のとおり開催された。

第八六回 藤原義天恩氏「弘前藩における平田国学―その思想的意

義に関する考察―

平成二十二年十二月十八日

(H)